

学位記番号： 修士第46号

氏名（本籍）： 須藤 葵（大阪府）

学位の種類： 修士（看護学）

学位授与年月日： 平成16年3月25日

学位論文題目： 「境界性人格障害患者の看護は難しい」という看護者の  
観念形成に関する研究

## 論文内容要旨

※整理番号	47	ふりがな 氏名	すどう あおい 須藤 葵
修士論文題目	「境界性人格障害患者の看護は難しい」という 看護者の観念形成に関する研究		
目的	Blumer シンボリック相互作用理論を基盤に、「境界性人格障害患者の看護は難しい」という看護者の観念の形成過程を明らかにし、境界性人格障害患者の看護の難しさについて言及する。		
方法	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 本研究は、質的記述的研究方法を用いた。</li> <li>2) 研究対象は、大阪府下民間精神科病院1施設を対象とし、この病院における研究対象者は正看護師9名、准看護師2名の合計11名であった。</li> <li>3) データ収集方法は、参与観察法と半構成的面接法を用いた。</li> <li>4) データの解析方法には、Grounded theory 法を用いた。</li> <li>5) データ収集期間は、平成15年5月6日～平成15年9月2日である。</li> <li>6) 倫理的配慮については、平成15年4月30日に滋賀医科大学倫理委員会において承認を受けた(承認番号15-5)。</li> </ol>		
結果	<p>看護者は境界性人格障害患者(BPD)との相互作用において、様々なフレームと比較対照しながら患者という対象を認知しようとしている。そのフレームとは、看護者が日常的に経験している様々な相互作用を通して認知した対象像である。また、看護者はBPD患者と相互作用を経験すると同時に、「心の作業」を繰り返している。これらの経験はBPD患者が入院している限り繰り返され、やがて「BPD患者の看護は難しい」という看護者の観念を形成していくという分析結果であった。加えて、看護が難しいことを“苦痛”とだけとらえているのではなく、“魅力的”なものとしてとらえることがあるということが明らかになった。</p>		
考察	<p>看護者がBPD患者を認知するために用いるフレームは、プロフェッショナルおよびプライベートという二つの観点のフレームに分類できる。また、看護者はフレームを通すことで時に当惑を引き起こしていることがある。</p> <p>あるフレームにおいては、BPD患者との相互作用を繰り返すたびに、優先的に用いられ強化されていく。これらはBPD患者に対する固定観念を生み出し、真の姿をとらえられない危険性を孕んでいる。</p> <p>看護者はBPD患者の看護の難しさを魅力的にとらえることがある。こうとらえることのできる看護者の状態はCsikszentmihaly (1975) が提唱した「フロー」状態と考えることができる。</p> <p>BPD患者の看護の難しさは、根本的に患者と看護者が相互作用するところに要因がある。さらに、看護者が使用するフレーム自体が、複雑な過程を経て認知されたものであり、BPD患者の理解を難しくさせていると考えられる。</p>		
総括	<p>「BPD患者の看護は難しい」という看護者の観念は、BPD患者との相互作用と、看護者の心の作業の経験が繰り返されることによって生じる。現実的に、BPD患者と看護者の二者が相互作用するという根本要因を取り除くことはできないし、難しさから逃れることもできない。しかしながら、看護者はBPD患者の行為を解釈・評価する時にどのようなフレームを使っているのか自己分析すること、客観的自己と相互作用することによってBPD患者の看護は難しくとも苦痛につながるのを避けることができ、BPD患者の看護が、“苦痛”ではなく“魅力的”だととらえることができる「フロー」状態へ導くことは可能であると考えられる。今後は、このような状態に導いていく教育プログラムの構築が望まれるところである。</p> <p>本研究は、病棟という社会、看護者の観念といった変化しやすいものを対象としており、今後の調査において同じ結果が導かれるとは限らないし、むしろ変化していくと思われる。今後とも、その変化自体を追っていくことが重要であると考えられる。</p>		